

白雪姫

SNEEWITTCHEEN
グリム兄弟
Brüder Grimm
菊池寛訳

むかしむかし、冬のさなかのことでした。雪が、鳥の羽のように、ヒラヒラと天からふっていましたときに、ひとりの女王さまが、こくたんのわくのはまった窓のところまどにすわって、ぬいものをしておいでになりました。女王さまは、ぬいものをしてしながら、雪をながめておいでになりましたが、チクリとゆびを針はりでおさしになりました。すると、雪のつもった中に、ポタポタポタと三滴てきの血ちがおちました。まつ白い雪の中で、そのまつ赤な血ちの色が、たいへんきれいに見えたものですから、女王さまはひとりで、こんなことをお考えになりました。

「どうかして、わたしは、雪のようにからだが白く、血のように赤いうつくしいほつぺたをもち、このこくたんのわくのように黒い髪かみをした子がほしいものだ。」と。

それから、すこしたちまして、女王さまは、ひとりのお姫さまをおうみになりましたが、そのお姫さまは色が雪のように白く、ほおは血のように赤く、髪の毛はこくたんのように黒くつやがありました。それで、名も白雪姫しらゆきひめとおつけになりましたけれども、女王さまは、このお姫さまがおうまれになりますと、すぐおなくなりになりました。

一年以上たちますと、王さまはあとがわりの女王さまをおもらいになりました。その女王さまはうつくしいかたでしたが、たいへんうぬぼれが強く、わがままなかたで、じぶんよりもほかの人がすこしでもうつくしいと、じつとしてはいられないかたでありました。ところが、この女王さまは、まえから一つのふしぎな鏡かがみを持っておいでになりました。その鏡をごろんになるときは、いつでも、こうおっしやるのでした。

「鏡かがみや、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。」

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いつておくれ。」

すると、鏡はいつもこう答えていました。

「女王さま、あなたこそ、お国でいちばんうつくしい。」

それをきいて、女王さまはご安心なさるのでした。というのは、この鏡は、うそをいわないということをし、女王さまは、よく知っていられたからです。

そのうちに、白雪姫しらゆきひめは、大きくなるにつれて、だんだんうつくしくなってきました。お姫さまが、ちようど七つになられたときには、青々と晴れた日のように、うつくしくなつて、女王さまよりも、ずっとうつくしくなりました。ある日、女王さまは、鏡の前にいって、おたずねになりました。

「鏡や、鏡、壁にかかっている鏡よ。」

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」

すると、鏡は答えていました。

「女王さまじよおう、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。」

けれども、白雪姫しらゆきひめは、千ばいもうつくしい。」

女王さまは、このことをおききになると、びっくりして、ねたましくなつて、顔を黄いろくしたり、青くしたりなさいました。

さて、それからというものは、女王さまは、白雪姫をごらんになるたびごとに、ひどくいじめるようになりました。そして、ねたみと、こうまんが、野原の草がいつぱいはびこるように、女王さまの、心の中にだんだんとはびこつてきましたの

で、いまでは夜もひるも、もうじつとしてはいられなくなりました。

そこで、女王さまは、ひとりのかりうどをじぶんのところにおよびになって、こ
ういつけられました。

「あの子を、森の中につれていっておくれ。わたしは、もうあの子を、二どと見たく
ないんだから。だが、おまえはあの子をころして、そのしょうこに、あの子の血を、
このハンケチにつけてこなければなりません。」

かりうどは、そのおおせにしたがって、白雪姫しらゆきひめを森の中へつれていきました。か
りうどが、狩りかにつかう刀かたなをぬいて、なにも知らない白雪姫の胸むねをつきさそうと
しますと、お姫さまは泣いて、おっしやいました。

「ああ、かりうどさん、わたしを助けてちょうだい。そのかわり、わたしは森のおく
の方にはいって行って、もう家にはけっしてかえらないから。」

これをきくと、かりうども、お姫さまがあまりにうつくしかったので、かわいそ
うになってしまつて、

「じゃあ、はやくおにげなさい。かわいそうなお子さまだ。」といいました。

「きつと、けものが、すぐでてきて、くいころしてしまうだろう。」と、心のうちで思
いましたが、お姫さまをころさないですんだので、胸の上からおもい石でもとれた
ように、らかな気もちになりました。ちようどそのとき、イノシシの子が、むこうか
らとびだしてきましたので、かりうどはそれをころして、その血ちをハンケチにつけ
て、お姫さまをころしたしょうこに、女王さまのところを持っていきました。女王
さまは、それをごらんになって、すっかり安心して、白雪姫は死んだものと思つて
いました。

さて、かわいそうなお姫さまは、大きな森の中で、たったひとりぼっちになつて
しまつて、こわくつてたまらず、いろいろな木の葉っぱを見ても、どうしてよいの
か、わからないくらいでした。お姫さまは、とにかくかけだして、とがった石の上を

とびこえたり、イバラの中をつきぬけたりして、森のおくの方へとすすんでいきました。ところが、けだものはそばをかけすぎますけれども、すこしもお姫さまをきずつけようとはしませんでした。白雪姫は、足のつづくかぎり走りつづけて、とうとうゆうがたになるころに、一軒けんの小さな家うちを見つけましたので、つかれを休めようと思って、その中にはいりました。その家の中にあるものは、なんでもみんな小さいものばかりでしたが、なんともいいようがないくらいりっぱで、きよらかでした。

そのへやのまん中には、ひとつの白い布きれをかけたテーブルがあつて、その上には、七つの小さな皿さらがあつて、またその一つ一つには、さじに、ナイフに、フォークがあつてあつて、なおそのほかに、七つの小さなおさかずきがおいてありました。そして、また壁かべぎわのところには、七つの小さな寝ねどこが、すこしあいだをおいて、じゅんじゅんにならんで、その上には、みんな雪のように白い麻あさの敷布しきふがしいてありました。

白雪姫は、たいへんおなかがすいて、おまけにのどもかわいていましたから、一つ一つのお皿さらから、すこしずつやさい、、のスープとパンをたべ、それから、一つ一つのおさかずきから、一滴てきずつブドウ酒しゅをのみました。それは、一つところのを、みんなたべてしまうのは、わるいと思つたからでした。それが、すんでしまうと、こんどは、たいへんつかれていましたから、ねようと思つて、一つの寝どこにはいつてみました。けれども、どれもこれもちようどうまくからだにあいませんでした。長すぎたり、短すぎたりしましたが、いちばんおしまいに、七ばんめの寝どこが、やっとからだにあいました。それで、その寝どこにはいつて、神さまにおいのりをして、そのままグッスリねむつてしまいました。

日がくれて、あたりがまつくらになつたときに、この小さな家の主人たちがかえつてきました。その主人たちというのは、七人の小人こびとでありました。この小人た

ちは、毎日、山の中にはいりこんで、金や銀ぎんのはいった石をさがして、よりわけたり、ほりだしたりするのが、しごとでありました。小人こびとはじぶんたちの七つのランプに火をつけました。すると、家の中がパツとあかるくなりますと、だれかが、その中にいるということがわかりました。それは、小人たちが家をでかけたときのように、いろいろのものが、ちゃんとおいてなかったからでした。第一の小人が、まず口をひらいて、いいました。

「だれか、わしのいすに腰こしをかけた者があるぞ。」
すると、第二の小人がいいました。

「だれか、わしのお皿さらのものをすこしたべた者があるぞ。」

第三の小人がいいました。

「だれか、わしのパンをちぎった者があるぞ。」

第四の小人がいいました。

「だれか、わしのやさいをたべた者があるぞ。」

第五の小人がいいました。

「だれかわしのフォークを使った者があるぞ。」

第六の小人こびとがいいました。

「だれか、わしのナイフで切った者があるぞ。」

第七の小人がいいました。

「だれか、わしのさかざきでのんだ者があるぞ。」

それから、第一の小人が、ほうぼうを見まわしますと、じぶんの寝ねどころが、くぼんでいるのを見つけて、声をたてました。

「だれが、わしの寝ねどころにはいりこんだのだ。」

すると、ほかの小人こびとたちが寝ねどころへかけつけてきて、さわぎだしました。

「わしの寝ねどころにも、だれかがねたぞ。」

けれども、第七ばんめの小人は、じぶんの寝どこへいってみると、その中には、いつてねむっている白雪姫を見つけました。こんどは、第七ばんめの小人が、みんなをよびますと、みんなは、なにがおこったのかと思つてかけよつてきて、びつくりして声をたてながら七つのランプを持ってきて白雪姫をてらししました。「おやおやおやおや、なんて、この子は、きれいなんだらう。」と、小人はさげびました。それから小人たちは、大よろこびで、白雪姫をおこさないで、寝どこの中に、そのままソツとねさせておきました。そして、七ばんめの小人は、一時間ずつほかの小人の寝どこにねるようにして、その夜をあかしました。

朝になつて、白雪姫は目をさまして、七人の小人を見て、おどろきました。けれども、小人たちは、たいへんしんせつにしてくれて、「おまえさんの名まえはなんと、いうのかな。」とたずねました。すると、

「わたしの名まえは、白雪姫というのです。」と、お姫さまは答えました。「おまえさんは、どうして、わたしたちの家にはいつてきたのかね。」と、小人たちはききました。そこで、お姫さまは、ママ母が、じぶんをころそうとしたのを、かりうどが、そつと助けてくれたので、一日じゆう、かけずりまわつて、やつと、この家を見つけたことを、小人たちに話しました。その話をきいて、小人たちは、「もしも、おまえさんが、わたしたちの家の中のしごとをちゃんと引きうけて、にたきもすれば、おとこものべるし、せんたくも、ぬいものも、あみものも、きちんときれいにする気があれば、わたしたちは、おまえさんを家においてあげて、なんにもふそくのないようにしてあげるんだが。」といいました。

「どうぞ、おねがいます。」と、お姫さまはたのみました。それから、白雪姫は、小人の家にいることになりました。

白雪姫は、小人の家のしごとを、きちんとやります。小人の方では毎朝、山にはいりこんで、金や銀のはいった石をさがし、夜になると、家にかえつてくるのでし

た。そのときまでに、ごはんのしたくをしておかねばなりませんでした。ですから、ひるまは白雪姫は、たったひとりであるすをしなければなりませんので、しんせつな小人たちは、こんなことをいいました。

「おまえさんのまま母さんに用心なさいよ。おまえさんが、ここにいることを、すぐ知るにちがいない。だから、だれも、この家の中にいれてはいけないよ。」

こんなことはすこしも知らない女王さまは、かりうどが白雪姫をころしてしまったものだと思って、じぶんが、また第一のうつくしい女になったと安心していましたので、あるとき鏡かがみの前にいって、いいました。

「鏡や、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。

国じゅうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」
すると、鏡が答えました。

「女王さまじよおう、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。

けれども、いくつも山こした、

七人の小人の家にいる白雪姫しらゆきひめは、

まだ千ばいもうつくしい。」

これをきいたときの、女王さまのおどろきようといったらありませんでした。この鏡は、けっしてまちがったことをいわない、ということを知っていましたので、かりうどが、じぶんをだましたということも、白雪姫が、まだ生きているということも、みんなわかってしまいました。そこで、どうにかして、白雪姫をころしてしまいたいものだと思ひまして、またあたらしく、いろいろと考えはじめました。女王さまは、国じゅうでじぶんがいちばんうつくしい女にならないうちは、ねたましく

て、どうしても、安心していられないからでありました。

そこで、女王さまは、おしまいになにか一つの計略けいりやくを考えだしました。そしてじぶんの顔を黒くぬって、年よりの小間物屋こまものやのような着物きものをきて、だれにも女王さまとは思えないようになってしまいました。こんなふうをして、七つの山をこえて、七人の小人こびとの家について、戸をトントンとたたいて、いいました。

「よい品物しなものがありますが、お買いになりませんか。」

白雪姫はなにかと思って、窓まどから首をだしてよびました。

「こんにちは、おかみさん、なにがあるの。」

「上等じょうとうな品で、きれいな品を持ってきました。いろいろかわったしめひもがあります。」といって、いろいろな色の絹糸きぬいとであんだひもを、一つ取りだしました。白雪姫は、

「この正直しょうじきそうなおかみさんなら、家の中にいれてもかまわないだろう。」と思いまして、戸をあけて、きれいなしめひもを買いとりました。

「おじょうさんには、よくにあうことでしょう。さあ、わたしがひとつよくむすんであげましょう。」と、年よりの小間物屋こまものやはいいました。

白雪姫は、すこしもうたがう気がありませんから、そのおかみさんの前に立ってあたらしい買ったのひもでむすばせました。すると、そのばあさんは、すばやく、そのしめひもを白雪姫の首をまきつけて、強くしめましたので、息ができなくなつて、死んだようにたおれてしまいました。

「さあ、これで、わたしが、いちばんうつくしい女になったのだ。」といって、ママ母はいそいで、でていってしまいました。

それからまもなく、日がくれて、七人の小人こびとたちが、家にかえってきましたが、かわいがっていた白雪姫が、地べたの上にあおれているのを見たときには、小人たちのおどろきようといったらありませんでした。白雪姫は、まるで死人のように

息もしなければ、動きもしませんでした。みんなで白雪姫を地べたから高いところにつれていきました。そして、のどのところが、かたくしめつけられているのを見て、小人たちは、しめひもを二つに切ってしまいました。すると、すこし息をしはじめ、だんだん元気づいてきました。小人たちは、どんなことがあったのかをききますと、姫はきようあつた、いっさいのことを話しました。

「その小間物売りの女こそ、鬼のような女王にちがいない。よく気をつけなさいよ。わたしたちがそばにいないときには、どんな人だって、家にいれないようにするんですよ。」と。

わるい女王の方では、家にかえつてくると、すぐ鏡の前について、たずねました。

「鏡や、鏡、壁にかかっている鏡よ。」

国じゅうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」

すると、鏡は、正直にまえとおなじに答えました。

「女王さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。」

けれども、いくつも山こした、

七人の小人の家にいる白雪姫は、

まだ千ばいもうつくしい。」

と、このことを女王さまがきいたときには、からだじゅうの血がいつぺんに、胸によつてきたかと思うくらいおどろいてしまいました。白雪姫が、また生きかえったということを知ったからです。

「だが、こんどこそは、おまえを、ほんとうにころしてしまおうようなことを工夫してやるぞ。」そういって、じぶんの知っている魔法をつかって、一つの毒をぬった櫛をこしらえました。それから、女王さまは、みなりをかえ、まえとはべつなおばあさんのすがたになって、七つの山をこえ、七人の小人のところに行って、トントンと戸をたたいて、いいました。

「よい品物がありますが、お買いになりませんか。」

白雪姫は、中からちよつと顔をだして、

「さあ、あつちについてちようだい。だれも、ここにいけないことになっているんですから。」

「でも、見るだけなら、かまわないでしょう。」

おばあさんはそういって、毒のついている櫛を、箱から取りだし、手のひらにのせて高くさしあげてみせました。ところが、その櫛がばかに、白雪姫のお気にいりましたので、その方に氣をとられて、思わず戸をあけてしまいました。そして、櫛を買うことがきまったときに、おばあさんは、

「では、わたしが、ひとつ、いいぐあいに髪をといてあげましょう。」といいました。

かわいそうな白雪姫は、なんの氣なしに、おばあさんのいうとおりにさせました。ところが、櫛の齒が髪の毛のあいだにはいるかはいらないうちに、おそろしい毒が、姫の頭にしみこんだものですから、姫はそのばで氣をうしなつてたおれてしまいました。

「いくら、おまえがきれいでも、こんどこそおしまいだろう。」と、心のまがつた女は、きみのわるい笑いを浮かべながら、そこをでていってしまいました。

けれども、ちようどいいぐあいに、すぐゆうがたになって、七人の小人がかえつてきました。そして、白雪姫が、また死んだようになって、地べたにたおれているのを見て、すぐまま母のしわざと気づきました。それで、ほうぼう姫のからだをし

らべてみますと、毒の櫛が見つかりましたので、それをひきぬきますと、すぐに姫は息をふきかえしました。そして、きょうのことを、すっかり小人たちに話しました。小人たちは、白雪姫にむかってもういちど、よく用心して、けっしてだれがきても、戸をあけてはいけないと、ちゅういしました。

心のねじけた女王さまは、家にかえって、鏡の前に立っていいました。

「鏡や、鏡、壁にかかっている鏡よ。

国じゅうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」

すると、鏡は、まえとおなじようにに答えました。

「女王さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。

けれども、いくつも山こした、

七人の小人の家にいる白雪姫は、

まだ千ばいもうつくしい。」

女王さまは、鏡が、こういったのをきいたとき、あまりの腹だちに、からだじゅうをブルブルとふるわしてくやしがりしました。

「白雪姫のやつ、どうしたって、ころさないではおくものか。たとえ、わたしの命がなくなっても、そうしてやるのだ。」と、大きな声でいいました。それからすぐ、女王さまは、まだだれもはいつたことのない、はなれたひみつのへやにいった、そこで、毒の上に毒をぬった一つのリンゴをこさえました。そのリンゴは、見かけはいかにもうつくしくて、白いところに赤みをもっていて、一目見ると、だれでもかじりつきたくなるようにしてありました。けれども、その一きれでもたべようものな

ら、それこそ、たちどころに死んでしまうという、おそろしいリンゴでした。

さて、リンゴが、すっかりできあがりですと、顔を黒くぬって、百姓のおかみさんのふうをして、七つの山をこして、七人の小人の家へいきました。そして、戸をトントンとたたきますと、白雪姫が、窓から頭をだして、

「七人の小人が、いけないといいましたから、わたしは、だれも中にいれるわけにはいきません。」といいました。

「いいえ、はいらなくてもいいんですよ。わたしはね、いまリンゴをすててしまおうかと思っているところなので、おまえさんにも、ひとつあげようかと思ってね。」と百姓の女はいいました。

「いいえ、わたしはどんなものでも、人からもらってはいけないのよ。」と、白雪姫はことわりました。

「おまえさんは、毒でもはいつていると思いなさるのかね。まあ、ごらんなさい。このとおり、二つに切って、半分はわたしがたべましょう。よくうれた赤い方をおまえさんおあがりなさい。」といいました。

そのリンゴは、たいへんじょうずに、こしらえてありまして、赤い方がわだけに、毒がはいつていました。白雪姫は、百姓のおかみさんが、さもうまそうにたべているのを見ますと、そのきれいなリンゴがほしくてたまらなくなりました。それで、ついなんの気なしに手をだして、毒のはいつている方の半分を受けとってしまいました。けれども、一かじり口にいれるかきれないうちに、バツタリとたおれ、そのまま息がたえてしまいました。すると、女王さまは、そのようすをおそろしい目つきでながめて、さもうれしそうに、大きな声で笑いながら、

「雪のように白く、血のように赤く、こくたんのように黒いやつ、こんどこそは、小人たちだつて、助けることはできません。」といいました。そして、大いそぎで家にかえりますと、まず鏡のところにかけてたずねました。

「鏡や、鏡、壁にかかっている鏡よ。」

国じゅうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」

すると、とうとう鏡が答えました。

「女王さま、お国でいちばん、あなたがうつくしい。」

これで、女王さまの、ねたみぶかい心も、やつとしずめることができ、ほんとうにおちついた気もちになりました。

ゆうがたになって、小人たちは、家にかえってきましたが、さあたいへん、こんども、また白雪姫が、地べたにころがって、たおれているではありませんか。びっくりして、かけよってみれば、もう姫の口からは息一つすらしていません。かわいいそうに死んで、もうひえきってしまったのでした。小人たちは、お姫さまを、高いところにはこんでいって、なにか毒どくになるものはありはしないかと、さがしてみました、ひもをといたり、髪かみの毛をすいたり、水や、お酒で、よくあらってみたりしましたが、なんの役にもたちませんでした。みんなでかわいがっていたこどもは、こうしてほんとうに死んでしまって、ふたたび生きかえりませんでした。

小人たちは、白雪姫のからだを、一つの棺かんの上にのせました。そして、七人の者が、のこらずそのまわりにすわって、三日三晩泣きくらししました。それから、姫をうずめようと思いましたが、なにしろ姫はまだ生きていたそのまま、いきいきと顔色も赤く、かわいらしく、きれいなものですから、小人たちは、

「まあ見ろよ。これを、あのまっ黒い土の中に、うめることなんかできるものか。」
そういって、外から中が見られるガラスの棺かんをつくり、その中に姫のからだをねか

せ、その上に金文字で白雪姫という名を書き、王さまのお姫さまであるということも、書きそえておきました。それから、みんなで、棺を山の上にはこびあげ、七人のうちのひとりが、いつでも、そのそばにいて番をすることになりました。すると、鳥や、けだものまでが、そこにやってきて、白雪姫のことを泣きかなしむのでした。いちばんはじめにきたのは、フクロウで、そのつぎがカラス、いちばんおしまいにはトがきました。

さて、白雪姫は、ながいながいあいだ棺の中によこになっていましたが、そのからだは、すこしもかわらず、まるで眠っているようにしか見えませんでした。お姫さまは、まだ雪のように白く、血のように赤く、こくたんのように黒い髪の毛をしていました。

すると、そのうち、ある日のこと、ひとりの王子が、森の中にまよいこんで、七人の小人の家にきて、一晚とまりました。王子は、ふと山の上にきて、ガラスの棺に目をとめました。近よつてのぞきますと、じつにうつくしいうつくしい少女のからだは、いつています。しばらくわれをわすれて見とれていました王子は、棺の上に金文字で書いてあることばをよみ、すぐ小人たちに、

「この棺を、わたしにゆずってくださいませんか。そのかわりわたしは、なんでも、おまえさんたちのほしいと思うものをやるから。」といわれました。けれども、小人たちは、

「たとえわたしたちは、世界じゅうのお金を、みんないただいても、こればかりはさしあげられません。」とお答えしました。

「そうだ、これにかわるお礼なんぞあるもんじゃあない。だがわたしは、白雪姫を見ないでは、もう生きていられない。お礼なぞしないから、ただください。わたしの生きているあいだは、白雪姫をうやまい、きつとそまつにはしないから。」王子はおりいっておたのみになりました。

王子が、こんなにまでおっしゃるので、氣だてのよい小人たちは、王子の心もちを、氣のどくに思つて、その棺をさしあげることになりました。王子は、それを、家来たち^{けらい}にめいじて、肩^{かた}にかついではこばせました。ところが、まもなく、家来のひとり^{ひとり}が、一本の木につまずきました。で、棺がゆれたひょうしに、白雪姫がかみ切つた毒^{どく}のリンゴの一きれが、のどからとびだしたものです。すると、まもなく、お姫さまは目をパツチリ見ひらいて、棺^{かん}のふたをもちあげて、起きあがってきました。そして元氣づいて、

「おやまあ、わたしは、どこにいるんでしょう。」といいました。それをきいた王子のよろこびはたとえようありませんでした。

「わたしのそばにいるんですよ。」といって、いままであつたことをお話しになって、そのあとから、

「わたしは、あなたが世界じゅうのなにもものよりもかわいいのです。さあ、わたしのおとうさんのお城^{しろ}へいっしょにいきましょう。そしてあなたは、わたしのお嫁^{よめ}さんになってください。」といわれました。

そこで、白雪姫もしようちして、王子といっしょにお城にいきました。そして、ふたりのごこんれいは、できるだけつぱに、さかんにいわわれることになりました。た。

けれども、このおいわいの式^{しき}には、白雪姫のまま母である女王さまもまねかれることになりました。女王さまは、わかい花嫁^{はなよめ}が白雪姫だとは知りませんでした。女王さまはうつくしい着物^{きもの}をきてしまったときに、鏡^{かがみ}の前^{まえ}にいつて、たずねました。

「鏡や、鏡、壁^{かべ}にかかっている鏡よ。

国じゅうで、だれがいちばんうつくしいか、いつておくれ。」

鏡は答えていいました。

「女王さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。

けれども、わかい女王さまは、千ばいもうつくしい。」

これをきいたわるい女王さまは、腹をたてまいことか、のろいのことばをつぎつぎにあびせかけました。そして、気になって気になって、どうしてよいか、わからないくらいでした。女王さまは、はじめのうちは、もうごこんれいの式しきにはいくのをやめようかと思いましたが、それでも、じぶんでかけていって、そのわかい女王さまを見ないでは、とても、安心できませんでした。女王さまは、まねかれたご殿てんにはいりました。そして、ふと見れば、わかい女王になる人とは白雪姫ではありませんか。女王はおそろしさで、そこに立ちすくんだまま動くことができなくなりました。

けれども、そのときは、もう人々がまえから石炭せきたんの火の上に、鉄てつでつくったうわぐつをのせておきましたのが、まっ赤にやけてきましたので、それを火ばしでへやの中に持ってきて、わるい女王さまの前におきました。そして、むりやり女王さまに、そのまっ赤にやけたくつをはかせて、たおれて死ぬまでおどらせました。

底本：「グリム 世界名作 白雪姫」光文社

1949（昭和24）年3月5日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005年2月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。